

「消化管の病理と生検組織診断」

中 村 恭 一 筑波大学教授
喜 納 勇 浜松医科大学教授 著

北里大学教授
岡 部 治 弥

何日間かかかって、時間をひろいながら、本書を読了したが、大変教わることの多い、また興味津々たる内容で、各所で深い感銘をうけた。長年にわたり消化管の診断学にたずさわって来た、また今後もたずさわるものとして、同じく今この道を歩む人、今から歩もうとしている若い医師にとって、本書は必読の書であると断言してはばからない。

本書には2つの特徴があり、今までに類書を見ないと思う。本邦において、早期胃癌を中心として、病理学者との緊密な共同研究のもとに、胃のX線および内視鏡診断学の研究が極めて熱心に行われ、早期胃癌をはじめとして胃の診断学が世界をリードする素晴らしい進歩を遂げた時代は、すでにもうそう新しい事ではない。その当時から次々に現在に残るすぐれた病理学書が出版されたが、これらはすべて胃癌ないし胃疾

患を対象としたものであり、本著者のお一人中村教授も胃癌に関する名著をあらわしておられる。しかしこれらはすべて胃疾患の、それも切除材料を検索の材料としたものである。それらに対し、本書の内容は、わずかに小腸を除き、現在内視鏡直視下にて組織細片の採取可能な消化管の広汎な領域の生検材料を主体とした病理組織学的診断学の研究成果を、広汎かつすぐれた材料をもとにして詳述したものである。その内容については、著者お二人の恩師である太田邦夫東京都老人総合研究所長、先輩である菅野晴夫癌研所長の序に精しく紹介されている。特に太田先生は本書は本邦消化器腫瘍学発展の一時期を劃するものであり、将来この領域の発展の鍵となるべきものが含まれていると激賞している。

著者のお一人である中村教授は極

めて温厚篤実かつ学識あくまで豊かな病理学者であり、私の日頃から畏敬する病理学者である。喜納教授はかつて20数年前、ニューヨークの一病院にて、病理のレジデントとして1年を共にすごした仲である。帰国後も、この道一筋に大いに努めて来られた病理学者である。このお二人の共著として、このユニークな、消化器臨床病理を志す病理医は申すに及ばず、消化器臨床医にとっても、座右の書として、精読すべき本書が出版された事に心の奥底からの喜びを覚えるものである。願わくは、ますます研究と思索をすすめ、改版をかさね、Morsonの消化器病理書をはるかにしのぐ、世界の消化器病理学書に育てあげられん事を希うものである。

B5 頁346 図22 写真465 原色図24
1980 ¥15,000 千300 <医学書院刊>